

あつたかいおべん当

おおみず
大水 音諒

子どものほくでも「いそがしい」って言っているのかな。

今年の四月から、ほくは小学四年生になりました。ほくが通っている学校では、四年生になると一週間のほとんどが六時間じゅ業になります。そして部活動、クラブ活動、委員会にさん加するようになります。勉強もむずかしくなり、宿題も多くなったので、ほくは四月から毎日つかれてしまっていました。

ほくのお母さんは、毎日ほとんど休みもなく仕事に行っているので、ほくは学校が終わると、学校の近くにある児童育成センターへ行きます。みんなそこのことを「センター」とよんでいます。

三年生までは部活がなかったので、じゅ業が終わるとセンターへ行き、おやつを食べたり宿題をしたり、友達と遊んだりしながらお母さんのおむかえを待っていました。でも今は、部活が終わってほくがセンターへ着く時間と、お母さんのおむかえの時間がほとんどいっしょなので、センターで友達と遊ぶ時間もあります。体もつかれているし、宿題や勉強を家に帰ってからやるうとしても、なかなかやる気が出ませんでした。そのせいか、テストでも答えをまちがえることがふえていきました。

ほくはだんだん学校に行きたくなってしまいました。朝になると、

「もう学校やだ！ 今日はずっ対行かない！」

と言って、お母さんをこまらせることが多くなりました。でもお母さんに説とくさせられて、結局学校へ行くことになりました。ほくはほつとできる時間も場所もないような気持ちでいました。そんなふうに感じていたある日の夕方、

「のり、さん歩しに行こうか。」

とお母さんがほくに言いました。夕焼けがとってもきれいで、外の風がすずしくて、それだけで気持ちがつきりする感じがしました。それから時どきお母さんとさん歩をするようになりました。金曜日は家に帰るとお母さんと二人で足湯をしました。足湯をしながら、ほくは学校や部活のことを話します。そしていつも最後に、

「一週間よくがんばったね。」

とお母さんは言ってくれます。ほくはいつの間にか「学校に行きたくない。」と言わないようになりました。

一学期の終業式の後、センターへ行きました。お母さんが作ってくれたおべん当を食べようとしたら、手紙が入っていました。

「のりへ。一学期、一日も休まずに学校へ行つてえらかったね。お母さんはそのことをほめたいと思います。通知表のことは気にしないでいいから、元気に帰っておいで。」

ほくは心の中がじわつと温かくなって、さめているはずのおべん当が、とても、とても温かく感じられました。